



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	大学院生のより深い学びを実現する授業研究についての 一考察(fulltext)
Author(s)	櫻井,真治
Citation	東京学芸大学次世代教育研究センター紀要, 1: 23-35
Issue Date	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/159431
Publisher	東京学芸大学次世代教育研究センター
Rights	

大学院生のより深い学びを実現する授業研究についての一考察

櫻井 眞 治*

(2020年1月10日受理)

SAKURAI, S: The Study of Considering the Values on Learning Deeper of Graduate Students.

ISSN 2435-3876

This study was performed to examine the value of deeper learning among graduate students, to determine ways to solve problems, such as discussions on lessons are not deepened.

A questionnaire was sent to graduate students regarding a lesson studies seminar. The results of this study clarified the value of deeper learning among graduate students, and suggested ways to solve the problems. For example, focusing carrying out observing a lesson and discussing for two straight times, and considering a paper on a lesson study before observing a lesson. Furthermore, this study involved problems, e.g., linked classes, and carrying out descriptions of writing down the main points and discussion of graduate students.

KEY WORDS : Deeper learning, the Values of graduate students, Lesson studies

* *Curriculum Center for Teachers, Tokyo Gakugei University*

1. 問題の所在

筆者はこれまで、大学院教育学研究科において、「授業研究」に関わる科目を担当してきた。そして、この科目の指導にあたっては、受講生が多様な授業に出会い、その授業を分析し考察できるようになることを重視してきた。それは、次のような理由による。修了後、多くの受講生が教職に就くため、まず授業で起きている事実アンテナを張り、それを解釈し、適切な対応を考え、実践していくための知見を得ること。また、事前に授業を構想する段階においても、子どもの表れや教師にとって都合のよくない事態も想定し、それに対応する手だてを練っておくための知見を得ることである。このようにこの授業が、学校現場の授業実践につながるものにしたと願ってきたのであった。

確かに、受講生達は、授業映像や授業記録を通して多くの授業に出会い、仲間と語り合うことを通して、子どもと教師の言動を解釈するとともに、その授業のよさと課題を明らかにし、改善案を考えようとしてきた。勿論筆者は、授業で扱う授業映像の学習指導案や、授業記録を事前に配布し、予習して臨むように働きかけてきた。しかしながら、自分の気づいたことや考えたことに立ち止まってもう一度考え、その過程を経て新たな見方を生み出すような受講生の姿は、なかなか見られなかったのである。

その要因としては、1回の授業で1本の授業映像や授業記録を扱ってきたことにあると考えられた。1週間に1度の授業においては、1回1回で完結することは、区切りがよい。しかしその一方で、「この授業はこのような授業であった」という授業の概要理解に留まっていたり、授業をめぐって気になったことが出合われたところで終了と

* 東京学芸大学次世代教育研究センター

なっていたりし、お互いの考えをもっと聞きたいことに進んでいくことが十分にできていなかったのである。

渡辺、岩瀬は、対話型模擬授業検討会を提案している⁽¹⁾。この研究は、模擬授業を実施し、その後、模擬授業の授業者と学習者が、授業中に考えたことや感じたことについて協議を行うものである。そして、参加した学生達の成長として、「学習者側の視点を踏まえて、自らの授業実践について日誌に記述するようになったこと」と、「省察を深めるための場づくりへの意識の高まり」を挙げている。また、研究の課題として、「両者が共に向かうべき対象世界（教科内容となっている文化）の存在が抜け落ちやすいこと」と、「検討会における話し合いの深まりがどのように生じているか談話分析などを通して明らかにすること」を挙げている。

対話型模擬授業検討会の継続を通して、学生達が「学習者側の視点」を意識するようになったことは、子どもの側に立って授業を構想し展開しようとする構えにつながっていく。また、「省察を深めようと場づくりに動いたこと」は、主体的な姿であり、学校現場での校内研究にもつながっていくであろう。一方で、「対象世界への追究の視点」が抜け落ちやすいことは、学生達の協議においてよく経験することであり、その視点を意識することによって授業の深まりに迫っていかれることに、目をひらいていくようにしたい。また、「検討会における話し合いの深まりをとらえること」は、本研究の問題意識とも一致するものである。

ここまで述べてきたような、筆者のこれまでの実践の課題分析と、先行研究の成果と課題に学び、本研究においては、以下のように指導計画を立案し、実践することにした。指導計画を次のように動かしてみることで、受講生達により深い学びが生まれるのではないかという仮説をもつてのことである。

- (1) 授業映像を観て語り合う場を、2回連続で設定する。
- (2) 実践者の論文がある場合は、その検討を前の回で行ってから、授業映像を視聴し語り合う。

令和2年4月から実施される小学校学習指導要領（平成29年告示）においても、「主体的・対話的で深い学び」の授業改善が求められている⁽²⁾。教職に就き、子ども達の前に立つ院生であるからこそ、このような深い学びの実現を自身で実感していることが不可欠であり、大学院の授業においてその実現を求めていく必要があるのである。

2. 研究のねらいと方法

2.1 研究のねらい

受講生がより深く学ぶことを意図した指導計画を立案し、大学院の授業実践を行う。そして、受講生の学びの価値を考察することを通して、指導計画、授業実践の成果と課題を明確にする。

2.2 研究の方法

(1) 研究仮説と今回の実践の手だて

- ① 1つの授業映像をめぐる協議を2回連続で行う。
 - ② 授業者の論文がある場合は、前回でその検討を行ってから、授業映像を視聴し協議を行う。
- 上記の①と②は、次のような研究仮説に基づいている。

①については、授業の概要理解で終わるのではなく、1回目から2回目へと検討の焦点がより定まり、語り合うことを通して、より深く授業を理解することができるようになるのではないか。

②については、論文を読んで、研究の方法、論の展開等について学ぶことも、大学院生にとっては必要なことである。授業者が執筆した論文には、その授業者の実践に関わる問題意識や主張が打ち出されている。事前にそれを学ぶことによって、視点を明確にして授業映像を観ることができ、そのことが授業をめぐるより深く考えることにつながっていくのではないか。

(2) 分析の対象

分析の対象は、2018年4月から7月に筆者の授業を受講した13名の大学院生（A生からM生）のレポートの記述内容である。全授業が終了した後で、レポートの提出を求め、その記述を分析し考察する。レポートの内容については、次頁のように指定した。

レポートの内容

授業研究特論を振り返って、以下の①～③の点について述べて下さい。

字数は、1頁40字×40行、1頁～2頁で。

- ①授業研究特論を通して心に残ったこと、学んだこと（変化したことや今後の問題意識等）
- ②1本の授業映像を基にした協議を2回連続で実施したことについて
 - よかったこと、学んだこと
 - よりよくするために、もっとこうするとよいということ
- ③2つの授業実践について、授業者の論文をめぐる協議を経てから、授業映像を観て協議したことについて
 - よかったこと、学んだこと
 - よりよくするために、もっとこうするとよいということ

(3) 分析の方法

全受講生である13名の大学院生（A生からM生）のレポートの記述内容を、分析する。ここでは、A生のレポートを例に出して、分析の手順を述べる。

① A生のレポートの記述から、筆者がA生の主張が色濃く表れていると、とらえたキーワードを抽出する。下表内では、下線部がそれにあたる。なお、表内の○はよかったこと、学んだことを表し、●はよりよくするためにもっとこうするとよいことである。

A生のレポート記述から、キーワードを抽出する

A生

- ①抽出兒からつながらる授業記録の重要性。個を記録しているはずなのに、結果的に集団の記録としてまとめることができ、いかに授業が子ども同士の結びつき（協働）によって成立しているのを感じ取る。実践者と研究者それぞれの論文から、自分の立場の良さを十分に生かしつつ、指摘を越えるための工夫を学び取る。
- ②○自分の意見が定まり、主張もその場限りではない調べた情報をもとにした正確なものになる。見落としの発見。1回目とは違う子どもに着目したり様々に工夫して見たりすることで新たな発見があった。数をこなすだけでなく、質を意識して同じ実践を何度も見ることが大切である。
 - 初めて授業研究にふれる学生が多いことを踏まえると、視点を示して考えてみるという展開も初めの方では、大切ではないか。
- ③○「何を伝えたいか」、「実践の根拠はどこなのか」を意識して映像を見ることができたので、授業記録が取りやすかった。「本当に主張は正しいのか？」においては、批判的な立場で授業を検討して意見を持つことができた。
 - 論文の説明に重点を置いている学生と、論文中の授業実践に重点を置いている学生がおり、若干混乱している学生も見られたので、ある程度の範囲を絞って検討することで、同じような方向性の下で行うことができる。

- ② 抽出したA生のキーワードを一覧表に整理する。
- ③ ②を見て、A生のとらえている成果と課題をキーワードとして表す。次頁の表の一番右の枠のように、A生のとらえた成果と課題の考察を行う。
- ④ 同じような作業をB生からM生についても行い、一覧表を作成する。

A生のとらえた成果と課題を表に整理し、考察する

	①この講義を通して、心に残ったこと、学んだこと	②1本の授業映像の協議を、2回連続で実施したこと	③論文をめぐる協議を経てから、授業映像を観て協議したこと	成果と課題の考察
A生	抽出児からつながる授業記録の重要性。	○自分の意見が定まり、主張もその場限りではない、調べた情報を基にした正確なものに。質を意識。 ●視点を示して考えてみる。	○批判的な立場で授業を検討して意見をもつ。 ●ある程度範囲を絞って検討。	○抽出児に注目することで授業全体も見える。 ●視点の提示、焦点化の必要性。

3. 実践事例「現代授業研究特論」

3. 1 授業のねらいと、授業についての確認

(1) 授業のねらい

授業のねらいは、次の2点であることを受講生に伝えた。

- ・文献から、授業研究の現在の動向、研究方法等についてとらえる。
- ・授業VTRや授業記録、実際の授業から「子どもと教師が力を発揮してつくる授業」の様相と、それを支えているものについて考察する。

(2) この授業についての確認

次の4点を受講生と確認した。

- ・受講者の専攻や問題意識に応じて、授業映像、授業記録、実践記録、論文を選定する。
- ・公開研究会、校内研究会に参加し、協議することも予定している。
- ・評価については、出席状況、発表内容、協議への関わり、レポート（作品）等から、総合的に判断する。
- ・テキストは、『授業研究』を創る 教師が学びあう学校を実現するために⁽³⁾を使用する。

3. 2 指導計画の実際と授業の展開

次頁に示したものが、この授業の指導計画とその実際である。

現代授業研究特論の実際

2018.7.23版

※網掛け部分が、本研究の提案部分である。
(番号・○生)は、A生からL生の発表担当である。

授業の実際

- ① 4 / 16 オリエンテーション, ドスルコスル 小6総合「多文化共生」実践
- ② 4 / 23 授業VTRの視聴と協議1 小4国語「ごんぎつね」実践①
(4 / 30は, お休み)
- ③ 5 / 7 授業VTRの視聴と協議2, 発表の計画 小4国語「ごんぎつね」実践 ②
- ④ 5 / 14 授業記録を読み, 協議する1 小6社会科「防災と私」実践 (①I生)
- ⑤ 5 / 21 テキストを読み, 協議する1
・授業研究を創るために (②M生)
・実践経験者から生み出される授業記録と意味解釈 (③A生)
- ⑥ 5 / 28 テキストと論文を読み, 協議する2
・子どもの思考と人間形成に視座をおく徹底した授業分析の視点から学ぶ (④H生)
・総合的な学習の時間における「探究の過程」をスパイラルに高めるブリッジとしての省察 論文 (⑤E生)
- ⑦ 6 / 4 授業VTRの視聴と協議3 小6総合「多文化共生」実践①
- ⑧ 6 / 11 授業VTRの視聴と協議4 小6総合「多文化共生」実践②
- ⑨ 6 / 18 テキストと論文を読み, 協議する3
・授業研究に期待する (⑥B生)
・より深い省察の促進を目指す対話型模擬授業検討会を軸とした教師教育の取り組み 論文 (⑦D生)
- ⑩ 6 / 25 テキストを読み, 協議する4
・教師と研究者の対話に基づく校内研修の充実 (⑧K生)
・授業研究を展望する 秋田 (⑨J生)
- ⑪ 7 / 2 授業記録を読み, 協議する2 小4理科「音」(⑩F生), (⑪L生)
- ⑫ 7 / 9 実践記録・論文を読み, 協議する
・「個が生きる授業」における「コンフリクト」の意義「いきものとなかよし」論文 (⑫G生)
・生活科における「子ども地名」の教材価値に関する考察 論文 (⑬C生)
- ⑬ 7 / 16 授業VTRの視聴と協議5 小1生活「大学探検」実践①
- ⑭ 7 / 23 授業VTRの視聴と協議6 小1生活「大学探検」実践②, 成果と課題のまとめ

本研究の提案である①1つの授業映像をめぐる協議を2回連続で行う。②授業者の論文がある場合は、前回でその検討を行ってから、授業映像を視聴し協議を行うについては、前頁の「現代授業研究特論の実際」に網掛けで示している。6回目(5/28)と7回目(6/4)と8回目(6/11)。12回目(7/9)と13回目(7/16)と14回目(7/23)である。なお、6回目から8回目は、三田大樹氏の論文⁽⁴⁾と授業映像⁽⁵⁾を扱い、12回目から14回目については、齊藤和貴氏の論文⁽⁶⁾と授業映像⁽⁷⁾を扱うことにした。また、各時間の授業は、次のように展開された。

(1) 授業記録, テキストや論文を読み合い, 検討を行う時間

- ①発表担当者が学んだこと, 気になったこと, みんなで考えたいことを5分程度で発表する。
- ②4人程度のグループで, よかったこと, 気になること等について話し合う。
- ③グループで話し合ったことを発表し, それを受けて全体協議をする。

(2) 授業映像を観て, 協議を行う時間

- ①授業映像を, 逐語記録を追ったり, 自分で記録を取ったりしながら視聴する。
 なお, 授業映像を再度視聴する時間では, 受講生の「この場面が気になっているのもう一度観たい」という声を生かして, 視聴する場面を選んでいく。
- ②4人程度のグループでよかったことや気になること, 改善案等について話し合う。
- ③グループで話し合ったことを発表し, それを受けて全体協議をする。

なお, 連続で同じ授業を視聴して協議する時間では, グループのメンバーを1回目と2回目に変更しないことにした。この意図は, 同じメンバーで協議することを通して, 前回からより深まったという実感を, 受講生が得ることを期待したからである。

(3) グループ活動の様子

(1)と(2)のどちらの時間においても, ②のグループ活動では, 一人一人の受講生が付箋紙に, よかったこと(黄色付箋), 気になること(青色付箋)を記入し, 考えを出しながら, 半分の大きさの模造紙に位置づけていくという活動を進めた。

そして, ③の全体発表では, 作成した模造紙を見せながら行い, それを黒板に掲示して全体協議を行った。

右の写真1・2は, 7回目(6/4)と8回目(6/11)に, あるグループが作成した模造紙である。この2回では, 小学6年生「多文化共生」の授業映像を視聴し, 協議を進めた。1回目の6月4日のものには, 青文字で「3つの観点」, 「はなしあい」, 「多文化共生」という文字が見られ, 出された付箋を括っている。

2回目の6月11日のものには, 「教師のかかわり」, 「3つの観点」, 「そもそも多文化共生って?」, 「対等な立場で」という青文字が見られる。1回目と比べると, よかったこと(黄色の付箋)が減少し, 気になること(青の付箋)の割合が増加している。この2回の模造紙を合わせると1枚の模造紙となり, 2回の協議の様子が目に見えるものとなっている。6月4日の模造紙の中央に緑色で記された「? 教師の意図・介入 『多文化共生』 子どもの目的意識」という言葉は, 2回の協議を経て, 6月11日に記されたものである。

写真1 あるグループの6/4の模造紙

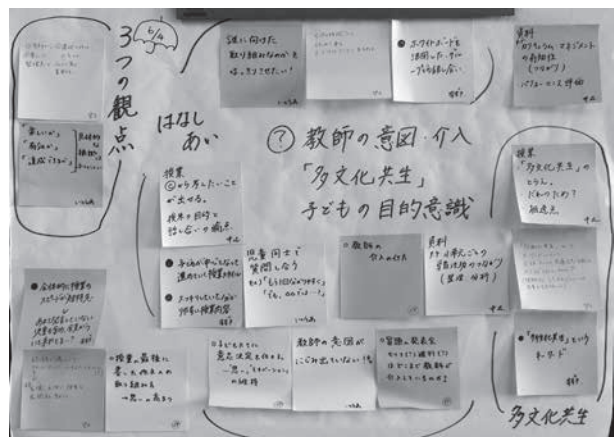
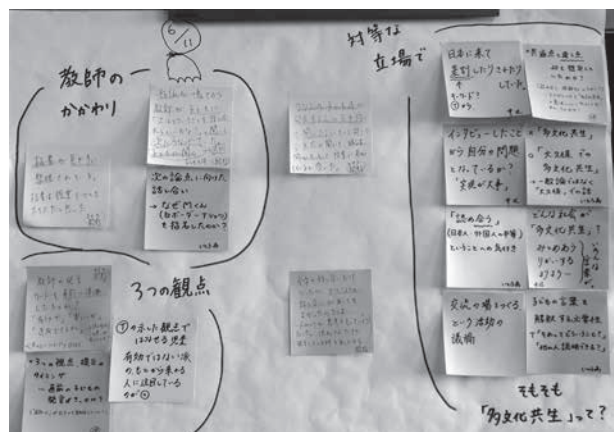


写真2 同じグループの6/11の模造紙



4. 受講生の得た成果と課題の考察

本実践において、受講生はどのような成果と課題をとらえたのであろうか。22頁から24頁の表1は、その一覧である。表中の記述に注目して、それを整理することで、受講生のとらえた成果と課題を明らかにし、改善案を引き出していく。

4. 1 現代授業研究特論を通して心に残ったこと、学んだこと

受講生がこの授業について価値づけていることは、大きく以下の3つに分類できる。

(1) 授業の観方や記録の取り方の変化

授業の観方や記録の取り方の変化を挙げている受講生が見られる。A生の「抽出児に注目することで、授業全体が見える」は、抽出児童に注目して記録を取ることで、授業全体も見えてくるということへの新たな気づきである。B生の「授業の山場を捉えたり、教師のここぞという場面での介入、児童の核になる発言に注目したりして考える視点」は、授業を観る視点が広がったことである。E生の「子どもの言葉と丁寧に向き合う。メモが大きく変わった」は、子どもの言葉への着目と、自身の授業記録の変化である。また、F生、G生、H生、L生は、「他の意見（他専攻の院生）による視野の広がり、批判的な見方」を挙げている。

このように、受講生は授業の観方や記録の取り方が変化したことを、価値づけているのである。

(2) 授業や授業研究についての新たな発見

授業や授業研究について新たな発見をした受講生も、見られる。D生の「授業力を上げることに繋がる授業研究は、積極的に行っていくべきである。現場に入って授業研究をするのが楽しみになった」からは、授業研究の価値を発見し、授業研究への意欲を高めていることが読み取れる。E生は、「授業研究が共有や共感を通して行われること」ととらえ、I生は、「授業が授業者以外の児童・生徒や機材等の環境に左右されることを痛感」というように、新たな発見をしている。

また、K生は、「現職の先生の実践を分析したり、改善策を話し合ったりしたことは、先輩である実践者を研究しただけでなく、私の実践への改善の視座を得ることと同義であった」と記している。高等学校で非常勤講師を務めていたK生は、自身の授業実践と重ねながら受講したことを価値づけているのである。

このように、受講生は、授業や授業研究について新たな発見をしたことを、価値づけている。

(3) よい協議会について考えること

「よい協議会とは?」「参加者が発言しやすい協議会とは?」ということに問題意識を持ち、価値づけている受講生も見られる。C生は、「『発言しにくい協議会』をどのようにすれば、参観者が発言しやすくなるのか。この授業でテキストを読み、協議会の参加者に求められるのは、授業者を最大限に尊重すること、授業中の子どもの具体的な姿に注目することであるとわかった」と記した。また、J生は、「対話型模擬授業検討会のように、授業者役と生徒役が対等の立場で検討を進めることが、学校現場でも行われるようになることが理想」と記している。

このように、受講生はよい協議会について考えることを、価値づけているのである。

4. 2 1本の授業映像を基にした協議を2回連続で実施したことについて

受講生がとらえている成果と課題は、大きく以下の4つに分類できる。

(1) より深く観察・協議し、新たな視点を得ること

A生の「質を意識」と、B生の「全体から部分へとつながり、焦点化」、協議の質」と、M生の「焦点を当てる」。E生の「児童の発言をじっくりと書き留める」。D生の「より吟味」と、F生の「より深い探究」、H生の「深く討論」。G生の「細かく観察」、「掘り下げ」。I生の「納得行くまで協議」。J生の「新たな視点」とL生の「再発見」。

ここに表れている受講生の言葉からは、より深く観察・協議し、新たな視点を得ることができたことを、成果としてとらえていることがわかる。

一方で課題として出されたことについて、受講生の意見が重なったものを中心にして、以下に3つ述べる。

(2) 1回目の話し合いを振り返り、2回目につなげること

グループ活動において、1回目の話し合いと2回目とのつながりがうまくいっていなかったことが明らかになった。それは、C生の「模造紙をLINEなどで共有し、次週までに各自で読んでおく」、E生の「1回目と2回目の話し

合いのつながりを生かせていなかった」、K生の「1回目のグループの話し合いの流れが思い出せずに困る」に表れている。

これは、筆者にとっては意外なことであった。1回目に作成した模造紙を参考にして、2回目も協議を進めている訳であり、また各自が1回目の協議のメモを残していれば、つながりを持って2回目に進んでいかれると思っていたからである。ただ、他にも多くの授業を受講している中で1週間に1度の授業であること、これまでに授業をめぐって協議した経験の多い受講生とあまり経験のない受講生がおり、授業を観る眼も多様であることという実態を考えると、1回目と2回目をつなぐ働きかけを行う必要があったのである。また、A生とB生の「視点を示して考えてみる」、D生の「疑問を持った所に合わせて、教師の動きや子どもの活動に特化したものに」のように、最初の頃は筆者が視点を示して映像視聴、協議を進めたり、焦点化する場面を提案したりすることも必要である。一人一人の受講生が、自ら視点を持ち、前回の流れを生かして協議できるようになってほしいものであるが、その姿の実現に向かって、受講生の実態やグループ活動の様子をとらえながら、ステップを踏んで指導をしていくことを考える必要がある。

(3) 2回目ですらに深めていくのは難しいこと

2回目のグループ活動の難しさを記している受講生も見られ、メンバーの交代を提案している。F生の「一度深めたものを、さらに深めていくのはとても難しく、固定的な考えになったと感じた場合もあった。グループを変えて行ってもよい」、H生の「前回の議論の記憶が臙げになり、2回目に実のある議論ができたことは少ない。メンバーを変えると面白い」である。

ここでも、H生の「前回の議論の記憶が臙げになり」のように、(2)の「1回目の話し合いを振り返り、2回目につなげること」が十分でないことが「深めていくのは難しい」の要因の一つとして考えられる。ただ、F生のように、「さらに深めていくこと」の難しさももっともなことである。筆者の経験でも、授業を参観して一度とらえた観方は、なかなか変化しないからである。しかし、観方は変化しなくても、他者からの意見を基にして考えた上で、「やはりそうだ」という考えに至ったのであれば、それは「より深く学んだ」姿と言えるであろう。F生が「固定的な考え」と記している考えに至ったプロセスは、どのようなものであったのだろうか、気になるところである。

(4) その他の課題

その他の課題として、次のような記述も見られた。

E生の「模造紙に似ているものを括るというまとめ方以外の方法を知る」については、グループ協議の際に、その目的に応じて、様々な思考ツールを提案し、受講生が活用できるようにしていくことも考えていきたい。L生の「映像の選別規準が不明」については、筆者とL生とで「よい授業」のイメージが異なるからであろう。筆者は、本授業のねらいにあるように、「子どもと教師がともに力を発揮してつくっている授業」、難しいことであるがその姿が見られるものを、授業映像として選定している。また、I生の「授業映像の音質の改善」、M生の「グループ活動の際に、各グループで自由に映像を見られるようにする」については、授業映像と逐語記録を併用することや、難しいことではあるが機器を整備することによって改善を図っていきたい。

4. 3 三田実践と齊藤実践において、論文をめぐる協議を経てから、授業映像を観て協議したことについて

受講生がとらえている成果と課題は、大きく以下の4つに分類できる。

(1) 論文に記されている理論、教師の子どもへの願いをとらえて、実践を観ること

成果としては、受講生から以下のような言葉が表れたことである。

B生の「論文と授業との関連」、E生の「実際にその知識を使ってみる」は、「論文と授業との関連」と言える。C生の「教師の研究内容を詳しく知る」、D生の「理論がどのように実践に生かされているか」、J生の「授業者の理念や考えがわかる」、L生の「授業者の新しい試み、やりたいことがわかる」は、「授業者の理論や新しい試みへの理解」である。G生の「教師の思いの理解。多角的に捉え考える」、K生の「授業者の授業設計への思い、子ども達への願いの理解」、F生の「先生の目標、子どもへの願いが実際に届いているか」、H生の「教師の意図と実際のズレ」は、「教師の思いの理解と、授業での実現」である。A生の「批判的な立場で授業を検討」、I生の「授業映像への理解が深いものに」、M生「論文で気になった視点を持って授業を観る」は、「授業の観方」である。

このように、受講生は「論文に記されている理論、教師の子どもへの願いをとらえて実践を観ること」を成果としてとらえているのである。

一方で課題として出されたことについて、受講生の意見が重なったものを中心にして、以下に3つ述べる。

(2) 論文検討の振り返りを受けて視点を定め、授業映像の視聴に進むこと

前項4.2(2)において課題として明らかになったように、ここでも受講生から論文についての協議と授業映像の視聴とのつながりについての課題が出されている。F生とH生の「授業を観る前に、論文を読んだ際にまとめた模造紙を見る」、I生の「論文検討のおさらいをする」、M生の「論文検討の視点の再認識」である。そして、論文の検討内容を振り返ることを受けて、A生の「ある程度範囲を絞って検討」ということに進んでいくことが望ましい。

このように、「論文の検討の振り返りを受けて視点を定め、授業映像の視聴に進むこと」という課題が明らかになった。

(3) 論文と授業映像視聴との往還を図ること

D生とE生からは、「授業映像を観てから、論文に立ち返ってみる」という意見が出され、J生からは、「論文と映像を2つ合わせて検討する時間」という意見が出された。また、B生から「授業映像を観てから背景の理論(論文)を見ると学びが変わるのか」、L生からも「授業映像を先に見てから論文を読むとよりわかりやすく、議論も活発になる」という意見も出された。

このような意見から考えるのは、論文と授業映像の往還を意識して指導に当たることが、「より深く学ぶ」に求められているということである。そこで、改善案としては、次のことが考えられる。①現行の指導計画で、授業映像を2回観て協議した後で、再度論文に戻って考える場を設ける。②授業映像を観て協議する1回目→授業者の論文を検討する回を挟む→授業映像を観て協議する2回目(そして、最後に再度論文に戻って考える場を設ける)という指導計画の展開にする。

(4) はっきりしなかったことについて、実際に授業者に尋ねること

論文や授業映像の協議を通してはっきりしなかったことについて、実際に授業者に尋ねたり、授業を参観したりする場を設けたいという意見も出された。C生の「教師から論文に書ききれなかった話をうかがったり、授業参観をしたりする」、G生の「協議で上がった気になる点について、実践者がどのように捉え、返答していたのかの様子を知る」である。

このことについては、授業者の研究協議会の記録を資料として添えることや、論文についての協議、授業映像をめぐる協議とともに、さらには実際の授業参観と協議ということも、考えていきたい。

表1 13名の受講生の成果と課題の抽出と考察 (その1)

	①この講義を通して、心に残ったこと、学んだこと	②1本の授業映像の協議を、2回連続で実施したこと	③論文をめぐる協議を経てから、授業映像を観て協議したこと	成果、課題の考察
A生	抽出児からつながる授業記録の重要性。	○自分の意見が定まり、主張もその場限りではない、調べた情報を基にした正確なものに。質を意識。 ●視点を示して考えてみる。	○批判的な立場で授業を検討して意見をもつ。 ●ある程度範囲を絞って検討。	○抽出児に注目することで授業全体も見える。 ●視点の提示、焦点化の必要性。
B生	授業の山場を捉えたり、教師のここぞという場面での介入、児童の核になる発言に注目したりして考える視点。「よい授業に共通する原理」	○全体から部分へとつながり、焦点化。 協議の質が上がった。 ●最初から授業を見る視点。全体共有の時間をもう少し。付箋の文字が見づらい。	○教師の思いや大事にしたい点。 論文と授業の関連。 ●授業を観てから背景の理論(論文)を見ると学びが変わるのか。	○視点の拡大、焦点化、協議の質の向上。 ●視点の提示、全体共有の時間、授業映像→論文であったら。
C生	どうすれば「よい」協議会になるのか。「発言しにくい協議会」をどのようにすれば、参観者が発言しやすくなるのか。授業者を最大限に尊重すること、授業中の子どもの具体的な姿に注目することである。	○1回目の協議で理解しきれなかった点について、互いに理解する。 ●模造紙をLINEなどで共有し、次週までに各自で読んでおく。	○教師の研究内容を詳しく知ること。 ●教師から論文に書ききれなかった話をうかがったり、授業参観をしたりする。	○どうすれば「よい」協議会になるか。 ●問題意識の連続性を図る、実践者から深める場を。
D生	授業力を上げることに繋がる授業研究は、積極的に行っていくべきである。現場に入って授業研究をするのが楽しみになった。	○一つの授業をより吟味する。 ●疑問を持った所に合わせて、教師の動きや子どもの活動に特化したものにする。	○実際の教材研究やそれに至る経緯などを知る機会。説明されている理論がどのように実践に生かされているのか検証。 ●授業映像を観た後にもう一度論文に立ち返って。	○授業研究への姿勢。 ●2回目の映像視聴場面の焦点化。授業映像と論文とのつながり。
E生	授業研究が共有や共感を通して行われること。子どもの言葉と丁寧に向き合う姿勢。メモが大きく変わった。授業研究の見方を知る。	○自分が気づけなかったが、他の学生が気になった点。児童の発言をじっくりと書き留める。 ●1回目と2回目の話し合いのつながりを生かしていなかった。似ているものを括るというまとめ方以外の方法を知っていれば、より作業が面白くなる。	○論文の書き方を知る。次回の授業映像で何に注目するのか。実際にその知識を使ってみる。 ●論文に書いてあることと授業映像を結びつけて考えること。授業を観てから論文について戻ってみる時間や意識づけ。	○共有や共感を大切にしたい授業研究。子どもの言葉と丁寧に向き合う。メモの変化。授業の見方。 ●2度の話し合いのつながり。模造紙への整理の方法。論文と授業映像とのつながり。

表 1 13名の受講生の成果と課題の抽出と考察（その2）

F 生	授業を批判的にみたり、比較して考えたりすることができるようになった。子どもの「見取り」の大切さと難しさ。	○新しい考えや改善策、より深い探究につながった。 ●1回目と2回目でグループを変えて行ってもよい。既に一度深めた考えをさらに深めていくのはとても難しく、固定的な考えになったと感じた場合もあった。	○授業を行う先生の目標や子どもへの願いが、実際に届いているかを考えながら、授業を見ることができた。 ●論文を読んだ際にまとめた模造紙を見る。授業映像を観る前に見直す時間があること。	○授業を批判的に、比較して観る。「見取り」の大切さと難しさ。 ●さらに考えを深めていくことの難しさ。授業を観る前の論文協議の振り返り。
G 生	気づかなかった視点からの意見や見取りによって、視野が広がった。	○協議によって新たに得た視点で、再度全体を観る。特に気になった箇所をさらに細かく観察したり、掘り下げたりしていく。	○授業への教師の思いを理解した上で客観的に観察することで、より理解が深まったり、多角的に捉え考えたりすることができる。 ●協議で上がった気になる点について、実践者がどのように捉え、返答していたのかの様子を知る。	○他の意見による視野の広がり。気になった箇所の掘り下げ。理解の深まり、多角的な捉え。 ●気になる点についての実践者からの返答を知る。
H 生	様々な専攻の受講生による授業を批判的に観る目線。	○1本の授業について深く討論する経験。付箋紙の記述によって、他者の考えを視覚化。 ●前回の議論の記憶が臍げになり、1回目に比べて実のある議論ができたことは少なかった。2回目は、グループを変えて新しいメンバーで議論すると面白い。	○授業を観る視点が多少定まった。教師の意図と実際のズレも明確になり、的を射た議論がしやすかった。 ●記憶がかなり薄れるので、授業を検討する際に、論文検討の模造紙を見る機会があると思い出せる。	○授業を批判的に観る。付箋紙による他者の考えの可視化。教師の意図と実際のズレの明確化。 ●2回目に実のある議論ができたことが少ない→メンバー変更。論文検討の際の模造紙の活用。
I 生	授業が授業者以外の児童・生徒や機材等の環境に左右されることを痛感。	○納得いくまで協議ができた。1回観ただけではわからないことや、新たな気づき等を感じ取れる。 ●授業映像の音質の改善。映像を観ながら付箋紙に記入すると、協議時間が長く取れる。	○どこに注意して観るかが分かり、授業映像への理解が深いものとなった。 ●授業映像を観る前に、論文検討のおさらいをするとよかった。	○授業は授業者以外の環境に左右される。納得いくまで協議。授業映像への注目点。 ●音質の改善。付箋紙記入の場。論文検討のおさらい。
J 生	対話型模擬授業検討会のような検討が学校現場でも行われるようになることが理想。	○自分の問題意識を深めつつ、さらに新たな視点で授業映像を観ることができた。 ●2回目に授業映像を観た後に、グループで話し合い、それを全体の場で共有する。	○授業者の理念や考えがわかり、観る視点がある程度定めて映像を観ることができた。 ●論文と映像を、2つを合わせて検討する時間があってもよい。	○対話型模擬授業検討会のような検討。新たな視点、視点を定めて映像を観る。 ●全体共有の場。論文と映像を合わせて検討する。

表1 13名の受講生の成果と課題の抽出と考察 (その3)

K 生	現職の先生の実践を分析したり、改善策を話し合ったりしたことは、先輩である実践者を研究しただけでなく、私の実践への改善の視座を得ることと同義であった。授業を円滑に行い、より児童・生徒の理解を促進するための技術。試行錯誤を諦めず、地道の工夫を重ねるためのモチベーション。	○よりしっかりと話し合いができた。 ●1回目のグループの話し合いの流れが思い出せずにみんなで困ったことがあった。話し合いの流れもメモするべきだった。	○実践者の授業設計への思い、子ども達への願いを理解してから授業映像を観たので、より立体的に観ることができた。 ●特に思い浮かばない。	○私の実践への改善の視座を得る。試行錯誤を諦めず、地道に工夫を重ねる動機。しっかりと話し合い、より立体的に授業を観る。 ●1回目の話し合いの流れが思い出せなくて困る。
L 生	授業の観察・研究のし方について、他学科の院生の意見が聞けたことで、自分の考えが深まったり、改まったりした。	○もう一度授業を観ることで、再発見できる。 ●授業映像の選別の規準が不明。児童のリアクションペーパーがないと、授業について判断ができない。	○授業者の新しい試みや、やりたいことがわかり、映像で確認できる。 ●授業映像を先に見てから論文を読むという順番でやるとよりわかりやすく、議論も活発になったのではないか。	○他学科院生の意見が聞けた。再発見。授業者の試みややりたいことを映像で確認。 ●授業映像選別の規準。児童のリアクションペーパー。授業映像を観てから、論文を読む。
M 生 ・ 聴 講	「授業研究を創る」の著書に出会い、著者の授業研究への思いや考えにふれる。研究授業や授業参観での授業を捉える視点を学び、自身の参観態度を振り返った。	○議論する内容に焦点を当てることはよい。 ●グループの話し合いの際に、各グループで自由に映像が見られるようにすると、見やすさや聞きやすさも加味される。	○論文で気になった視点を持ちながら、授業展開や実践内容を意識して観られる。 ●論文の協議で話された視点が、授業映像を観る時に再認識できていたのかがわからなかった。三田実践の3つの視点については、「NHKドスルコスル」のビデオクリップも活用できるとよかった。	○授業を捉える視点を学び、自身の参観態度を振り返る。気になった視点を持って授業映像を観る。 ●各グループで自由に映像が見られるようにする。論文協議の視点の再認識。インターネットのビデオクリップの活用。

5. 研究の成果と課題

本研究を通して得られた成果と課題を以下に述べる。

- (1) ①授業映像を観て語り合う場を、2回連続で設定する。②実践者の論文がある場合は、その検討を前の回で行ってから、授業映像を視聴し語り合う。この2つの手だてによって、受講生により深い学びを実現することができた。
- (2) 課題としては、次のものが引き出された。
 - ①受講生のより深い学びの実現に向けては、授業や論文をめぐる協議内容を振り返る場を設け、視点を明確にして次の回に進んだり、自分自身の変化を確かめたりする場を設けること。
 - ②授業研究について経験の様々な受講生が居ることに配慮し、その実態や活動の様子をとらえながら、ステップを踏んで指導を進めていくこと。
 - ③グループ協議の際の付箋紙の記述の変化や、話し合いの記録の分析も通して、受講生のより深い学びの様相を考察していくこと。

参考文献

- (1) 渡辺貴裕・岩瀬直樹, 「より深い省察の促進を目指す対話型模擬授業検討会を軸とした教師教育の取り組み」, 日本教師教育学会年報第26号, pp.136-146, 2018年
- (2) 文部科学省, 「小学校学習指導要領」, p.3, 2017年
- (3) 鹿毛雅治・藤本和久 編著, 「『授業研究』を創る 教師が学びあう学校を実現するために」, 教育出版, 2017年
- (4) 三田大樹, 「総合的な学習の時間における『探究の過程』をスパイラルに高めるブリッジとしての省察—学びに向かう力の原動力としての自律システム思考に着目して—」, 日本生活科総合的学習教育学会 せいかつか&そごう第25号, pp.28-37, 2018年
- (5) 三田大樹, 「ラップで心の距離を縮めYOU! 一理想のまち『多文化共生』に近づくための私たちの挑戦—」, 新宿区教育研究会生活総合部研究授業, 2017年11月
- (6) 齊藤和貴「生活科における『子ども地名』の教材価値に関する考察」日本生活科総合的学習教育学会 せいかつか&そごう第25号, pp.78-87, 2018年
- (7) 齊藤和貴, 「探検した場所に、ぴったりの名前をつけよう。」, 東京学芸大学附属小金井小学校生活科部内研究授業, 2018年1月